

「焼肉屋のおネエちゃん、永遠に」

一般

(氏名割愛)

「焼肉定食七五〇円。ライスとキムチは食べ放題」とにもかくにも腹が減って仕方がないとき、ぼくはよくその焼肉屋に通う。「はい、何名サン？ 三名やね？ よっしゃ、すぐソコのテーブル空くから待っててや。ご飯はあそこのおひつから、どんどん勝手によそってね。お次は何名？ ハイ…」。威勢のいいおネエちゃん、関西弁を駆使して、次々来る腹へこ客を手際よくさばく。「ゴメン、ちよつと混んできたから、相席で。えっ、もう食べ終わったん？ 毎度ーッ」。満席時の、食べ終わった客を帰らせる術はそれはもう芸術的で、客のほうも、「ネエちゃんにそう言われたら、帰らにやしゃあない」。お昼どきのラッシュアワーが、実にスムーズに気持ちよく回転する。

そんな彼女の姿が、ある日、店から消えた。(やめたのかな？) 久しぶりに訪れた焼肉屋は、待時間が格段に長くなっていて困ったのだが、数日後、ぼくは思いもかけぬところで彼女と再会する。場所は、駅前にある全国チェーンのハンバーガーショップ。「見習」のバッジをつけた彼女、ぼくを見てカウンター越しに顔を赤らめた。

そして、今まで聞いたことのないような小声で、「いらっしやいませ。こちらで：お召しあがり：でしょうか？」。舌をかみそうなたどどしい標準語と、ひきつりそうな笑顔をくれるではないか。「は、はい。チーズバーガーをひとつ、ここで」ぼくのほうも、なぜかどもちまう。「それでは、先に、お会計を…」〇〇円札からで、お釣りが：ありがとうございました。ごゆっくり、おくつろぎくだ：、ここまでマニュアルどおりの言葉で対応してきた彼女だったが、とうとう耐え切れなくなつてか、「ブツ」と吹き出してしまった。「かんにん：ウチ、アカンわ、やっぱり」。

そして今。彼女は元の焼肉屋の元気なネエちゃんに戻っている。「カワイイ女の子しようと思つたのになあ…」。慣れた手つきでコンロに火を入れるさまは自然で、言葉も笑顔もなめらかだ。ご飯、どんどんお代わりしていつてや。けど：混んできたら相席頼むネ」。ウイंकを一つ。次のテーブルへとひらひら飛び回る姿を見ると、なぜか安心してまた来ようと思つてしまふ、常連のぼくである。